

敦煌 B157 窟新発見ウイグル文「阿含経」断片二件

アイダール ミルカマル
阿依达爾 米爾卡馬力

はじめに

1988年から1995年にかけて敦煌研究院が敦煌莫高窟北区で六度にわたる考古学的発掘を行った。その結果、北区洞窟から多くのウイグル文献断片が発掘され、その写真は彭金章、王建軍、敦煌研究院によって編集された三巻本『敦煌莫高窟北区石窟』に掲載された。これらのウイグル文献の多くは仏典であり、「阿含経」断片も含まれていることが張鉄山教授によって明らかにされた。張鉄山の研究によれば B52, B53, B54, B125, B157, B159 の六つの洞窟から出た「阿含経」断片が七種あり、その行数、サイズ、及び参考文献は以下の通りである¹⁾：

文 献	行数	サイズ	経、卷	参考文献
B52 (甲) : 18	27+28	27.9×15.4	中阿含、卷 51	張 2001b Yakup 2003
B53 : 13	21+21	13.1×11 7.7×11.3	雜阿含、卷 7	張 2001a Yakup 2003
B54 : 14	32		別訳雜阿含、卷 15	張 2003c
B54 : 15	21		中阿含、卷 25	張 2003b
B125 : 1 (背)	96	67×25.7	增一阿含、卷 33, 34	張 2005
B157 : 16	15	14.8×6	長阿含、卷 1	張 2003b
B159 : 3-1, 2, 3 (背)	116 5 5	97.3×25.9 3.6×11.2 3.8×3.2	別訳雜阿含、卷 7	張 2001c 張 2003a

これらの中、B157 窟から発掘された断片 B157 : 16 は 2003 年に張鉄山によって、『長阿含経』に属することが判明したが、筆者は同窟出土のもう二つの断片 B157 : 25 と B157 : 17 も同じく「阿含経」に属することに気付いた。B157 : 25 は『長阿含経』卷 17 の一部であり、

1) 敦煌新発見のウイグル文献の研究状況と内容については、Yakup 2006 に詳しい紹介がある。この表の一部は Yakup 2006 のリストを参考にした。B54 : 14 の写真は『敦煌莫高窟北区石窟』(第一巻) に載せられていないが、張 2003c によれば五つの断片を組み合わせると、32 行となる。B159 : 3 については、張 2001c では断片を B159 : 3-1, 2, 3, 4 (背) の四つに分け、『敦煌莫高窟北区石窟』(第三巻) では B159 : 3-1, 2, 3 (背) の三つの断片とし、B159 : 3-1 を「左」「右」にわけている。

B157: 17 は『増一阿含経』巻 1 の一部である。張鉄山が確認した B157: 16 は『長阿含経』に属し、内容も筆跡も B157: 25 と B157: 17 と異なるが、同じ洞窟で「阿含経」断片が何枚も出土していることから、B157 洞窟では「阿含経」の翻訳が盛んであったことを示している。以上三枚の「阿含経」断片はすべて草書体である。B157: 25 の筆跡は粗略といえる。B157: 17 はきれいな細筆で書かれ、天地に匡郭がある。

以下ではまず B157: 25 と B157: 17 を簡単に紹介し、テキストのローマ字転写、日本語訳、対応漢文および注釈をあげる。ローマ字転写の [] で括ったものは推定再構形式である。ウイグル文テキストに書かれた漢字は対照する漢文中では太字で示す。転写の右肩の英字は原漢文の該当部分を示している。

I B157: 25

今までに発表された研究によれば、ウイグル文『長阿含経』断片は敦煌、ベルリン、サンクトペテルブルグに所蔵されており、ベルリンのものは百濟康義とツィーメ (Peter Zieme) 共著によって、サンクトペテルブルグの所蔵品は庄垣内正弘によってテキストエディションが提出されている。これらのウイグル文『長阿含経』の所蔵機関²⁾、行数、サイズ、参考文献はそれぞれ以下の通りである：

文 献	所蔵機関	行数	サイズ	巻属	参考文献
SI 2Kr. 18	サンクトペテルブルグ	22		巻 1	庄垣内 2000; 2003
SI Kr. IV 298	サンクトペテルブルグ	20	15.1×12	巻 1	Shōgaito 1998
B157: 16	敦煌研究院	15		巻 1	張 2003b
Ch/U7262	ベルリン	18	14.5×7	巻 2	Kudara and Zieme 1983
Ch/U3913	ベルリン	32	28.5×25.2	巻 2	同上
U6026	ベルリン	17+16	15×13.5	巻 3	Kudara and Zieme 1995
Ch/U6092	ベルリン	6	10×8.5 7×6	巻 4, 7	Kudara and Zieme 1983
Ch/U6113	ベルリン	16	10.5×16.5	巻 7	同上
TIID (DahlemIII40)	ベルリン	13	10.5×16.3	巻 8	同上
Ch/U7555	ベルリン	10		巻 21	同上

B157: 25 は先述のように『長阿含経』巻 17 に属する。縦 4.6cm、横 4.7cm で、草書体ウイグル文字で書かれている。表面と裏面のそれぞれ 8 行が読める。ウイグル文字の間に「又」、「勇健大將」、「汝今誰」、「進」等の漢字が書かれている。その中の「勇」の字は「専」のようにも見える。「誰」は「誑」字の書き間違いである。この間違いこそ、文献が今まで

2) 「サンクトペテルブルグ」はロシア科学アカデミー東洋写本研究所、「ベルリン」はベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミーを表す。

同定されなかった原因の一つであろう。

【転写】

157: 25 (表)

- 01 []kyd []
 02 [k]üntüz-ki köz[ünür^A
 03 []又 inčip nägü^B []
 04 []sač soqunup yunup^C []
 05 []yomγinta aldašip^D []
 06 []-lariγ 勇健大將 alp^E []
 07 [yert]inčü-tä bil^F []
 08 [vašaka]re braman-i[γ^G

157: 25 (裏)

- 01 [eli]gin öngin^H [öngin
 02 []čoγ-in yal[in-in^I
 03 [az-]ča yoriyu^J 汝今誰[]
 04 []ärgäy-s(ä)n meni^K 又 tüş[ürgäy
 05 []uluy quvray-imin^L []
 06 [前]進 ilig^M []
 07 [ög]rünčüg tep^N []
 08 []wz tw[]

【翻訳】

(表)⁰¹ (大王が夫人に聞く) : ⁰² (今夜は) 昼のような明るい (満月の日だ)。⁰³ (お前は) 又何を (するべきだと思う?) ⁰⁴ (答え: 髪) を洗い, 入浴し……⁰⁵ (太子が) 共に謀って (辺境の反乱を討伐すると答えた)。⁰⁶ (王が^s) 勇健大将 (に聞く)。⁰⁷ (大将が四兵を集めて) 天下の (動きを) 察知 (すると答えた)。⁰⁸ (王が雨舎) 婆羅門 (の所に行き……)。
 (裏)⁰¹ (阿闍世王が象に乗って, 五百の夫人を五百の牝象に乗らせ,) 一人ずつ手に (松明をもたせ), ⁰² (大王の) 威嚴 (を顯した)。⁰³ (大王が^s) 少し進んで [汝今誰] (寿命童子に聞いた) : (お前は今私を欺いて,) ⁰⁴私を (陥入れようと) している。⁰⁵ (私を) 私の民衆 (に敵対させたいのか?) ⁰⁶大王 (が) 前に進めば [進], (必ず福) 慶 (を得る)。⁰⁷ (大王また少し前に歩いて寿命童子に) 聞く……⁰⁸……

【漢語原典】

[0107a21] 一時。佛在羅閱祇耆舊童子菴婆園中。與大比丘衆千二百五十人俱。

[0107a22] 爾時。王阿闍世韋提希子以十五日月滿時。命一夫人而告之曰。今夜清明^A。與晝無異。當何^B所為作。

[0107a25] 夫人白王言。今十五日夜月滿時。與晝無異。宜沐浴^C。與諸姝女五欲自娛。

[0107a27] 時。王又命第一太子優耶婆陀而告之曰。今夜月十五日月滿時。與晝無異。當何所施作。

[0107a29] 太子白王言。今夜十五日月滿時。與晝無異。宜集四兵。與共謀議^D伐於邊逆。然後還此共相娛樂。

[0107b02] 時。王又命勇健大將^E而告之曰。今十五日月滿時。其夜清明。與晝無異。當何所為作。

[0107b04] 大將白言。今夜清明。與晝無異。宜集四兵。案天下。知^F有逆順。

[0107b05] 時。王又命雨舍婆羅門^G而告之曰。今十五日月滿時。其夜清明。與晝無異。當詣何等沙門婆羅門所能開悟我心。

[0107c19] 阿闍世王自乘寶象。使五百夫人乘五百牝象。手各^H執炬。現王威嚴^I。出羅闍祇。欲詣佛所。小行進^J路。告壽命曰。汝今誑我。陷固於^K我。引我大衆^L欲與冤家。

[0107c22] 壽命白言。大王。我不敢欺王。不敢陷固引王大衆以與冤家。王但前進^M。必獲福慶^N。

[0107c24] 時。王小復前進。告壽命言。汝欺誑我。陷固於我。欲引我衆持與冤家。如是再三。所以者何。彼有大衆千二百五十人。寂然無聲。將有謀也。

(大正新脩大藏經第 01 冊 No.0001 長阿含經)

【注釈】

B157: 25 (表)

03) この行に挿入された漢字「又」は翻訳者によって挿入された文字で、ほかの翻訳方法があることを表す。B157: 25 (裏) 4 行目にも同じ表現がある。ウイグル語で yämä ter とセットで書かれることもあるが、この注記は、論書あるいは阿含類ウイグル文献によく使われている。inčip nāgü : inčip はウイグル語仏典では「当」、「而」、「即」等の漢字に当る [庄垣内 1993 : 268]。ここの inčip nāgü は漢文の「當何所為作」に当たるものと推定できる。

04) soqunup yunup : 漢文の「沐浴」に当たる。百濟とツィーメが発表した『中阿含經』断篇に類似の例がある :

suqunup yunup aritinip 「於十五日說從解脫時。沐浴澡洗。昇正殿已。」 [Kudara and Zieme 1990 : 132]。

08) [vašaka]re : <Skt. vaśakāra 「雨舍」; braman : <Skt. brāhmaṇa 「婆羅門」。

157: 25 (裏)

01) [eli]gin öngin [öngin: この行にはウイグル文字 gyn wyngyn だけが残っている。wyngyn は öngün で「各」にあたる。ウイグル文献の öngin öngin は漢文の「各」に当たられた例がある[庄垣内 1993: 311]。それに従ってこのウイグル文が漢文の“手各執炬”に当たると推定したい。gyn は eligin 「手(具格)」の一部と判断できる。

03) 汝今誰: 「誰」は「誑」の誤写である。

II B157: 17

B157: 17 も草書体ウイグル文字で書かれ、縦 13 cm、横 2.7 cm である。表面と裏面のそれぞれ 6 行が読める。ウイグル文字の間に「便」と「弥」二つの漢字が挿入されている。“便”字の偏が欠落している。“弥”字は“弥勒”を示す。考察の結果、B157: 17 が『増一阿含経』巻一に属し、一卷序品の頌に当たることが分かった。挿入された漢字はこの頌句の初めの漢字の一字を取ったものである。ほかの「阿含経」断片と同じく、ウイグル語訳文は原漢文の抜粋と考えられる。原漢文と対照すると、ウイグル文の表面と裏面の間に漢文頌の 20 行 40 句分が欠落していることがわかる。しかし、翻訳された部分だけを考えるなら、訳文は完璧で、抜けている部分はない。多くのウイグル『阿含経』が短い抜粋文であるのに対し、B157: 17 が長文をそのまま翻訳しているところが特徴的である。

ウイグル文『増一阿含経』はベルリン、マインツ、サンクトペテルブルグ、ストックホルム、京都、奈良、北京、敦煌等に保存されており、その文献の所蔵機関、行数、サイズ、該当巻及び参考文献は以下の通りである：

文 献	所蔵機関	行数	サイズ	巻属	参考文献
U2068+Mz609b+U1436+U1420	ベルリン	40+40		序品	Kudara and Zieme 1995
ウ 835	大谷?	4	8.5×6.3	巻 1	同上
Ch/U8166	ベルリン	9	9.5×9.3	巻 1	Kitsudo 2007
番号なし	北京国家図書館	28+23	不明	巻 1	張 1997
Ch/U6680	ベルリン	9	7.3×7.5	巻 15	Kitsudo 2007
K 六ウ +K 六	藤井有隣館	27+27		巻 24	庄垣内 1982
第 13 丁	天理図書館	15	18.5×18.5	巻 30	百済 1986
B125: 1	敦煌研究院	96	67×25.7	巻 33, 34	張 2005
SI Kr. I 172	サンクトペテルブルグ	29	14×25	巻 37	庄垣内 2003
SI Kr. I 173	同上	11+36	27×33	同上	同上
SI Kr. I 174	同上	8	7×7.5	同上	同上
SI Kr. I 175	同上	5	5×6.8	同上	同上
SI Kr. I 178	同上	2	13×6	同上	同上
SI Kr. I 186	同上	22+1	15×20.5	同上	同上
SI Kr. I 187	同上	29	12×37.5	同上	同上
SI Kr. I 188	同上	12	9.8×9.5	同上	同上
SI Kr. I 189	同上	9	11.5×8.8	同上	同上
K 九ウ +K 九	藤井有隣館	24+19		巻 50, 51	庄垣内 1982

これまで『増一阿含経』に関する研究の中で、序品の初めに現れる頌に関わる断片についてのものはいくつかある。その中、U2068, Mz609b, U1436, U1420 と写真だけが残されているウ 835 は百済とツィーメによって出版された。また同じ巻一序品に属する Ch/U8166 が橘堂の手で研究され [Kitsudo 2007: 102-104], 北京の国家図書館に所蔵されている番号不明の一件のウイグル断片は張鉄山によって刊行された。この中に Ch/U8166 を除くベルリン藏品は全て楷書体で書かれている。大谷藏品のウ 835 と Ch/U8166 は草体で書されているが、筆跡が B157: 17 と異なる。ただ張鉄山が刊行した北京国家図書館所蔵の文献だけが B157: 17 といくつかの同じ特徴を持っている。

張鉄山によって刊行された北京国家図書館蔵『増一阿含経』断片は以下の特徴を持っている：

- 1) 草書体、貝葉型、両面使用である。
- 2) ウイグル文字の間に多くの漢字が挿入されている。その漢字はすべて一字で、頌句の文頭の漢字を一字とったものである。

これらの特徴は B157: 17 と全く同じである。写真によっても両文献が同一の手で書かれたことが判る。これらの共通点に基づいて、B157: 17 と北京国家図書館の『増一阿含経』が同一の文献に所属すると言って間違いないであろう。

張鉄山の紹介によれば、北京国家図書館のウイグル文『増一阿含経』残巻は敦煌から出たものらしく、1928 年以前に東北のある県の県長である苗希甫という人が西北旅行で、敦煌の千仏洞に参詣した時、王道士に所望して入手したという。この巻子が 1933 年に北京故宮午門で一度展示され、1936 年に方雨楼氏に收藏され、そのあと方雨楼から北京図書館に寄贈されたそうである。莫高窟北区新発見の B157: 17 が、北京の国家図書館のこのウイグル文『増一阿含経』と同類であることは、国家図書館藏品も莫高窟北区石窟の遺物であることを証明している。

【転写】

157: 17 (表)

- 01 *úr keč turγurup*^A [yertincü-tä 云 nātāgin]
 02 *kāz-igi itlinmāz-ün ulay-*[inta^B 三 üč asanke-]
 03 *lar-tin bārü yīymiš termiš*[-tä^C nom ārdini-lār-]
 04 [ig 使] *tört bölüg qu[vray] b[o]l[up āsidgāli]*
 05 [nom ā]rdinig^D [巴 ā]šidü tükätdüktä ötrü^E
 06 [bolur öngi üdrülgāli alqu türlüg āmgā]k-lār-tin^F

157: 17 (裏)

- 01 [] 便 *ötrü*^G []
 02 [yaruq yašu]q [sā]viglig önglüg qirtiš^H

03 [-līy üz-ä 普 tüzü yapa yar]utdī tīnlīy-lar-īy: qaltī
 04 [yangī tuymış kü]n tāngr[i tā]g^I. 弥 māytri bodistv^J
 05 kör[ü]p ya[ru]q-īn ulatī āz-rua xormuz-t[a 收]^K
 06 ya[]

【翻訳】

(表)⁰¹ (仏法) が世間で長く存在するの (を願う)。⁰² 如何に次第は連続において失われな
 いか? ⁰³ 三阿僧祇から (法宝を) 集めたことで⁰⁴ 四部の人々 (がこの法を聞くことができ
 る)。⁰⁵ (この仏法を) 聴き終わった後に⁰⁶ 既に (苦) から (離れる)。

(裏)⁰¹ (阿難尊者は) 便ち (光輝き), ⁰² 和やかな顔色で⁰³ 普く人々を照らした。あたかも
 朝陽のごとし。⁰⁴ 弥勒菩薩が⁰⁵ この光を見て, そして帝釈天, 梵天が⁰⁶ ……

【漢語原典】

《増一阿含經》序品第一

迦葉哀愍於世故	加憶尊恩過去報
世尊授法付阿難	布演法長存世 ^A
云何次第不失緒 ^B	三阿僧祇集 ^C 法寶
使後四部得聞法 ^D	已聞便 ^E 得離衆苦 ^F
(中略)	
阿難仁和四等具	意轉入微師子吼
顧眄四部瞻虛空	悲泣揮淚不自勝
便 ^G 奮光明和顔色 ^H	普照衆生如日初 ^I
弥勒 ^J 觀光及釋梵 ^K	收捨遲聞無上法

(大正新脩大藏經第 02 冊 No. 0125 增壹阿含經)

【注釈】

157: 17 (表)

02) káz-igi itlinmáz-ün ulay は漢文の「次第不失緒」に当たる。一行目の後ろの半分が抜
 けているが、漢文の「云何」に当たるはずなので、nātāgin と補正した。ulay は漢字の
 「緒」に当たる。「緒」は「始まり」、「続き」、「系統」などの意味を表す。

03) [üç asanke]-lar-tin bärü yiymiş termiş[-tä nom ärdini-lär-ig] は漢文の「三阿僧祇
 集法寶」に当たる。-lar-tin の前は切れているので、漢文に従って [üç asanke-] と補正
 した。

04) tört bölüg qu[vray] b[o]l[up äsidgäli nom ä]rdinig は漢文の「使後四部得聞法」にあ
 たる。「四部」は「四部衆」を顯す。『増一阿含經』卷一序品では「四部」は時に「四部

衆」の形で出てくる。ウイグル文献の訳者は「四部」を正しく理解し、「衆」を顕す *quvray* を入れて翻訳した。

05) [ä]rdini: < Skt. ratna 「宝」。[ä]šidü tükätdüktä は漢文の「已聞」に当たる。äšidü の ä 字がぬけているが、原漢文によって ä を補った。

06) この行にはウイグル文字 *k-lär-tin* だけが残されている。この行は漢文の「得離衆苦」に当たる故、[*bolup öngi üdrülgäli alqu türlüg ämgä*] *k-lär-tin* と補正した。öngi üdrül-が「離」と当たる例がある： *baytän öngi üdrülmäk* 「離繫」[庄垣内 1993: 386]。「衆苦」が *alqu türlüg ämgäk* に当たる。ウイグル文献には *alqu türlüg ämgäk* という形がよく使われている[Röhrborn 1977: 102; DTS: 39]。

157: 17 (裏)

01) 漢字「便」はウイグル文字の間に挿入された漢字である。第5行にも同じような挿入漢字「弥」が見られる。この二つの挿入漢字は頌句の文頭の漢字を一字とったものである。筆者が B157: 17 と同一の文献と判断した北京国家図書館所蔵の『増一阿含経』にも同じ性格の挿入漢字が見られる。それらの漢字を原典から見ると以下ようになる：

思惟一法無放逸	云何一法謂念佛
法念僧念及戒念	施念去相次天念
息念安般及身念	死念除亂謂十念
此名十念更有十	次後當稱尊弟子
初化拘隣真佛子	最後小者名須拔
以此方便了一法	二從二法三從三
四五六七八九十	十一之法無不了
從一增一至諸法	義豐慧廣不可盡
一一契經義亦深	是故名曰增壹含

以上の例の太字は北京国家図書館所蔵の『増一阿含経』のウイグル文字の間に挿入された漢字である。これらの挿入漢字はすべて文頭の一字だということがわかる。これに従い、B157: 17 の切られている部分にも漢字が挿入されているはずだと思い、再構の時、「普」、「收」などの漢字を入れておいた。

02) *yaruq yašuq* [sā]viglig önglög qirtiš は「便奮光明和顔色」に当たる。önglög の前に文字 *vyklyk* だけが残されている。「和」に当たる部分と思われるので *sāviglig* と推定した。[sā]viglig の前は切れているが、漢文の「光明」に当たるはずなので *yaruq yašuq* を補った。「光明」が *yaruq yašuq* に当たる例がある： *qarangruta kūsāsār tiläyür ücün yruq yašuq-uy* 「闇中欲見求光明故」[庄垣内 1993: 400]。

öng qirtiš は熟語で、漢文の「容貌」に当たる：

öngi qirtiš-i çoyi yalini ädgüsi ädrämi savi sözi yaruqi yaltriqi ton didimtä ulati savlari 「容貌威徳言語光明衣冠等事」[庄垣内 2008: 624]。ここで öng qirtiš は漢文の「顔色」に当

てられている。öng の後ろに接尾辞-lüg が付いているため、qirtis の後ろにも接尾辞-liy をつけておいた。

03) qalti (...täg) は漢字の「如」に当たり、その後が欠けているが、漢文の「普照衆生如日初」に当たる。また文字 tängri もしっかり見える。百済とツィエ研究したウイグル文献に似た表現の「禪智慧力如月初」があつて dyan bilgä biliglig küc ärsär qalti yangi tuymış ay tängri-täg ärür と翻訳されている [Kudara and Zieme1995: 63]。これによって qalti の続きを yangi tuymış kün tängri täg と補った。

05) äz-rua : < Sogd. 'zrw' (Skt. brahma) 「梵天」。xormuz-t[a] : < Sogd. xwrmwzt' 「帝釈天」。äß-rua xormuz は漢文の「釈梵」に当たる。

[追記] 本稿執筆に際して庄垣内正弘教授と木田章義教授のご指導を仰いだ。ここに記し、両教授に深甚なる謝意を表する。

参考文献

DTS (Древнетюркский словарь) (1969). Ленинград.

Kitsudo, Koichi (2007) Supplements to Uigurische Āgama-Fragmente. *Aspects of Research into Central Asian Buddhism: In Memoriam Kōgi Kudara*, edited by Peter Zieme. Brepols Publishers.

Kudara, K. & P. Zieme (1983) Uigurische Āgama-Fragmente (1). *Altorientalische Forschungen* 10, 130-145.

Kudara, K. & P. Zieme (1990) Uigurische Āgama-Fragmente (2). *Altorientalische Forschungen* 17, 269-318.

Kudara, K. & P. Zieme (1995) Uigurische Āgama-Fragmente (3). *Bulletin of Institute of Buddhist Cultural Studies, Ryūkoku University* 34, 23-73.

百済康義 (1986) 天理図書館蔵ウイグル語文献『天理図書館報ビブリア』86, 180-127 (逆頁).

百済康義 (1990) ウイグル語訳『別訳雑阿含経』断片 —— “Pelliot ouigour 218” の意味すること —— 『仏教学研究』45-46, 99-124.

中村 元 (1981) 『佛教語大辞典』東京書籍.

彭金章・王建軍・敦煌研究院 (2000) 『敦煌莫高窟北区石窟』(第一卷) 文物出版社.

彭金章・王建軍・敦煌研究院 (2004) 『敦煌莫高窟北区石窟』(第三卷) 文物出版社.

Röhrborn, Klaus (1977) *Uigurisches Wörterbuch* (Lieferung 1). Wiesbaden.

Shōgaito, Masahiro (1998) Three Fragments of Uighur Āgama. In: Laut, J.P. & M. Ölmez (ed) *Bahşı Ögdisi: Klaus Röhrborn Armağanı*. Freiburg/Istanbul, 363-378.

庄垣内正弘 (1993) 『古代ウイグル文阿毗達磨俱舍論実義疏の研究』II 松香堂.

庄垣内正弘 (2003) 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究 —— ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト ——』京都大学大学院文学研究科.

- Yakup, Abdurishit (2003) On the Newly Unearthed Uyghur Buddhist Texts from the Northern Grottoes of Dunhuang. *Indien und Zentralasien Sprach- und Kulturkontakt*. Vorträge des Göttinger Symposions vom 7. Wiesbaden, 259-276.
- Yakup, Abdurishit (2006) Uighurica from the Northern Grottoes of Dunhuang. *A Festschrift in Honour of Professor Masahiro SHŌGAI TO's Retirement STUDIES ON EURASIAN LANGUAGES*. "Studies on Eurasian Languages" Publication Committee, 1-41.
- 張 鉄山 (1997) 回鶻文『増一阿含経』残卷研究『民族語文』2, 28-33.
- 張 鉄山 (2000) 三葉回鶻文『中阿含経』残卷研究『民族語文』3, 11-17.
- 張 鉄山 (2001a) 莫高窟北区 B53 窟出土回鶻文『雜阿含経』残葉研究『敦煌研究』2, 101-106.
- 張 鉄山 (2001b) 敦煌莫高窟北区出土的回鶻文『中阿含経』残葉研究『中央民族大学学报』4, 28-31.
- 張 鉄山 (2001c) 敦煌莫高窟北区 B159 窟出土回鶻文『別訳雜阿含経』残卷研究『民族語文』6, 36-46.
- 張 鉄山 (2003a) 敦煌莫高窟北区 B159 窟出土回鶻文『別訳雜阿含経』残卷研究 (二) 『民族語文』3, 59-67.
- 張 鉄山 (2003b) 敦煌莫高窟北区出土三件回鶻文仏経残片研究『民族語文』6, 44-52.
- 張 鉄山 (2003c) 敦煌莫高窟北区出土两件回鶻文仏経残片研究『敦煌学輯刊』3, 79-86.
- 張 鉄山 (2005) 莫高窟北区 B125 窟出土回鶻文『増一阿含経』残卷研究『敦煌学輯刊』3, 6-21.

(新疆大学人文学院・日本学术振興会)